

「行為の負荷」と敬語使用

横倉 真弥 (岐阜協立大学経営学部)

キーワード：敬語使用、三価ポライトネス、R 値、再序列化、事態化方法

1. はじめに

話し手と聞き手の人間関係という条件と行為の目的や意図、話題の遂行の全体を特定の「事態」として把握し、その「事態」に適切に対応した聞き手（他者）への配慮のための言語形式を選択・表現する人間の言語行為の解明を目指して、Brown&Levinson (1978/87) は、ポライトネス概念を軸とした“普遍的”な枠組み（ポライトネス理論）を提唱した。そしてまた、日本語の敬語をその実例として取り上げていることも、広く知られている。

Brown&Levinson のポライトネス理論が言語学研究に与えた影響は大きく、そのために様々な点をめぐって反論がなされてきた。なかでも Brown&Levinson の唱えた言語形式選択の“普遍性”に対して、配慮表現の在り方は各文化によって異なるというものが多い。こうした反論の例として、敬語が取り上げられることがある。しかしながら、敬語表現をその固有性と言語行為の“普遍性”との交差するところから捉えることこそが必要であろう。こうした点を踏まえて、滝浦 (2005) は、敬語使用はその動機において「フェイス」侵害への回避が強く、ポライトネスとの親和性があることを指摘して、敬語研究におけるポライトネス概念に基づく可能性を展望している。また、Brown&Levinson も各文化の特徴を軽視しているわけではなく、各文化の特徴は言語形式選択の要因となる話者間の P 値（上下関係）・D 値（社会的距離）・R 値（ある文化におけるある行為の負荷度）の把握の在り方に集約されて現れることを強調しているのである。

敬語使用の観点からこの 3 つの要因を見ると、従来の敬語研究では P 値、そして D 値との関連から研究されることが多かった。その理由として、敬語が表すとする「敬意」は「敬して遠ざける」に由来することから、P 値・D 値という対人距離との親和性が強かったことがあげられよう。そのため、対人距離を表さない、R 値が問題にされにくくなっていったといえよう。しかしながら、敬語が実際に使用される場合は、人間関係と目的等の遂行とを一体化させて、メッセージの内容と配慮とを同時に表現している。したがって、R 値を不問にしたまま、P 値・D 値に偏った敬語研究は、敬語が表す配慮の全容を明らかにすることはできないと思われる。

本稿では、以上の点を踏まえて、敬語使用における R 値の役割について、その試論を述べることにしたい。

2. 言語行為としての「ポライトネス」

本稿の主題と関わることから、改めてポライトネス理論を支える「フェイス」「ポライトネス」「ポライトネス・ストラテジー」、またポライトネス・ストラテジーの選択に影響を与える要因（P 値・D 値・R 値）などの概念の内容を考えることから始めたい。

2.1 Goffman における「フェイス」「敬意表現行為」

「ポライトネス」に関する理論が、Goffman の「フェイス」についての考察（ゴッフマン 2002）を起点としていることは広く知られている。Goffman は特定の出会いから生じる自己をめぐるイメージに沿って人は行動する傾向があるとし、この「自己イメージ」を「フェイス（面子）」と名付けた。この「自己イメージ」すなわち「面子」は出会いから生じると断っているように、行為者とその行為の受容者との間で相互に参照し承認しあうことで生まれ、行為者自身がそこに「積極的な社会的価値」を見出し要求する「自己イメージ」である。そして、この価値を行為者自身が自己に要求する時、それは行為者の「自尊心」「誇り」となり、その意味でこの「フェイス」は最も個人的な所有物となる。しかしながら同時に、この「フェイス」は様々な社会的属性を通じて社会から貸し与えられた「社会的フェイス」でもある。このことは、行為者が「フェイス」にふさわしくない行為をした場合、この「フェイス」は社会から取り上げられてしまうという社会的警鐘が内在していることを意味している。

以上のことから、Goffman は行為者自身がこの「自尊心」（「積極的な社会的価値」）を持つと同時に他者（相手）の「自尊心」を承認し、思いやりを持つことで、対面的対話が成立するとみている。この他者への思いやりは「敬意」と言い換えられるが、その「敬意表現行為」は相手についての高い評価を適切に相手に伝える手立てとなる行為である。同時にまた「敬意表現行為」は、行為者が相手に対して今後も特定の仕方、つまりその「面子」をつぶさない仕方で接する約束を示す行為でもある。このように、Goffman のいう行為者の「敬意表現行為」とは相手（他者）志向であると同時に、相手に対して示す自制的約束という二つの面を含む。

Goffman は、この「敬意表現行為」を「回避」と「提示」の二つのタイプに分けている。「回避」は、行為者が相手から距離をとって相手の領域を侵さない行為であり、相手にとって苦痛、困惑、屈辱になることなどを話題にしないなどがあげられる。「回避」が「禁止」を意味するのに対して、「提示」は、例えばあいさつ・気付き・招待・賞賛・小さなサービスなどにみられるように、行為者が相手に対して「何をすべき」かの実行規定としてあらわされる行為である。この「提示」を通じて、その行為を受容する相手は自分が孤立していないこと、他者たちが自分や自分の個人的関心に関わっている、あるいは関わりたいと思っていることを知らされることになるのである。このように「提示」は行為者が相手との距離を縮める「敬意表現行為」であり、そしてそれを受容する相手の自我が他者に対してどれほど開かれているかを測る物差しともなるのである。さらに、これらの「敬意表現行為」と相補的な関係にあるのが「品位」である、と Goffman は指摘する。「品位」は身のこなし・着衣・振る舞いを通じて、その場にいる他者に対して、自分が周りから見てふさわしい性質を持つ人間か、そうでない人間かを示すからである。こうして「敬意表現行為」と「品位」は補いながら、自己と他者の「フェイス」を保持させて、対面的対話を成立・維持させることになるのである。

以上述べた所説に加えて、留意すべき二つの点を Goffman が指摘していることは重視すべきであろう。一つは「敬意表現行為」のうちの「回避」と「提示」との間には対立と葛藤があることの指摘である。例えば、相手の病気が気にかかっているとしてもその病気や症状が深刻である場合、それを話題にしてよいか迷う、などである。もう一つは、「回避」と「提示」がなされる人間関係の違い、すなわち社会的に同等の者同士と差がある者たちの違いによって、「回避」や「提示」のルール・制度化も異なるという指摘である。Goffman 自身は精神病院における医師・看護師・患者間の社会的関係に即して、この二つの問題の交差について社会的分析を行っているが、Goffman の所説、さらにこれらの指摘された問題を言語学の立場から受け継ぎ展開させたのが Brown&Levinson のポライトネス理論だといえよう。

2.2 Brown&Levinson のポライトネス理論

Brown&Levinson (1978/87) は、Goffman の「フェイス」概念を起点にしながら、接触・出会いにおいて生じる「フェイス」を脅かす行為（「フェイス威嚇行為」）とその威嚇を軽減する補償的行為、すなわち「ポライトネス」及びそのストラテジーを主題とした、ポライトネス理論を構築したといっただろう。

Brown&Levinson は「フェイス」を「すべての構成員が自分のために要求したいと願う公的な自己イメージ (Brown&Levinson 1978/87:79) - 「自尊心」とも言い換えている」と定義しているが、この「自己イメージ」は「公的」という言葉が示すように、行為者もその行為の受容者も共に参照・承認しあうことで成立することを意味している。この「フェイス」は二つの面を持つ。一つは「ネガティブ・フェイス」であり、他者によって、自らの行為を妨げられたくないという欲求、行為の自由と束縛からの自由という欲求を含む。もう一つは「ポジティブ・フェイス」であり、何らかの点で他者から認められたいという欲求、特に行為者の「公的な自己イメージ」が評価され、好ましく思われたいという欲求を含んでいる。こうした「フェイス」やその二つの側面に関する定義が、Goffman に依拠していることは明らかであろう。これと同時に Brown&Levinson は、聞き手によって理解されるよう企図された意図（目的）とそれを表す様々な言語表現を手段として使用することでコミュニケーションが成立するという Grice (1989) の「協調の原理」を前提とする。すなわち、会話には聞き手による話し手の意図に沿った合理的な推論が成立しているという前提である。こうして Brown&Levinson は対面的対話の話者が「合理性とフェイスを備えた行為者」であるという「モデル的人物」をポライトネス理論の土台として想定することになるのである。

以上の想定に基づいて、Brown&Levinson は会話の中で生じる「フェイス」に対する威嚇・侵害行為に注目し、そうした行為として次のような項目をあげている。ネガティブ・フェイスを脅かす行為として、命令・依頼・提案・助言・念押し・脅し・警告・挑発を、ポジティブ・フェイスを脅かす行為として、不同意の表明・批判・軽蔑・苦情・不敬・タブーな話題への言及などである。ネガティブ、ポジティブ・フェイスの両方を脅かす行為としては、苦情・妨害・脅し・感情の吐露、個人情報への要求などがある。これらの「フェイス威嚇行為」が Goffman の示した「回避」と「提示」の対立・葛藤の問題を受け継ぐことも明らかであろう。そして、Brown&Levinson は「フェイス威嚇行為」が人間の出会い・接触では不可避的であり、したがってその軽減がコミュニケーションの成立には不可欠であるとみる。

こうした「フェイス威嚇行為」の度合いは、話者間の社会的関係と、聞き手に対する命令・依頼などの「行為の負荷（負担）度」によって見積られる。すなわち、話者間の社会的関係を表す P 値（力・上下関係）、D 値（社会的距離）、そして R 値（ある文化におけるある行為の負荷度）である。R 値は文化や社会によって負担の軽重の序列が決められたものであり、ネガティブ・ポジティブ両面に関わる「フェイス威嚇行為」の度合いに直接かわるため、コミュニケーションに内在する「危険」要因でもあるのである。この P 値、D 値、R 値は話者にとっては所与の値であり、特に P 値、D 値は話者間に社会的序列をもたらしている。そしてこの所与の序列化は、話者間における「威嚇」度合いの見積りにあたっては、それに見合った想定として表れるのである。

Brown&Levinson は、こうした「フェイス威嚇行為」を話し手は認知して、その深刻度、すなわち「フェイスリスク」を軽減するという利益をもたらすストラテジーを合理的に選択し、それに見合った適切な言語行為を通じて表現するとしている。ストラテジーとしては、侵害・脅威が小さいと判断すれば軽減という「補償行為（ポライトネス）」をせざるにあらさまに、その行為を行うこともある。また、侵害・脅威の軽減が必要と判断すれば、ポジティブ・ポライトネス、すなわち、聞き手の肯定的自己イメージに好意や親密さを示して接近するか、またはネガティブ・ポライトネス、すなわち、聞き手の縄張り（テリトリー）や自己決定権を尊重して距離を置こうとする（控え目、抑制、改まり、敬意）ストラテジーを選択する。

さらに、ほのめかしや含意のように聞き手に逃げ道を与える「オフ・レコード」やリスクが大きいと判断した場合に「フェイス威嚇行為」をしない、あるいは禁止する、というストラテジーが加わる。これらのストラテジーは「フェイス」を侵害しないこと (Goffman でいえば「回避」) を基準にし、「フェイスリスク」に見合ったストラテジーであるといえよう。

このようにネガティブ・ポライトネス、ポジティブ・ポライトネスに基づくストラテジーは、言語の上で所与の P 値、D 値の差を縮小、または拡大したり、R 値の負荷度 (負担感) を軽減したりする、すなわち、話者が想定する所与の値を変化させて、再序列化を行うことによって支えられているのである。したがって、Brown&Levinson のポライトネス概念は「フェイス」の脅威・侵害に対して、言語使用による P 値、D 値、R 値の再序列化を通じて行う緩和・減少という補償行為であり、言語形式そのものの丁寧度とは内容が異なるため、区別されることになるのである。

2.3 Leech のポライトネス理論

以上の Brown&Levinson のポライトネス理論の主要概念を修正し再定義して、異なるポライトネス理論を提示したのは Leech (2014) である。

Leech の Brown&Levinson のポライトネス理論に対する批判、修正点は多岐にわたるが、まず双方が主軸としている「ポライトネス」概念を見ることにしよう。Leech (2014) は「ポライトネス」を「コミュニケーションにおける利他主義 (リーチ 2020 : 3)」、すなわち会話の場合では相手に、利益や価値を与えるように (あるいは、そう見えるように) 話したり行動したりすることと定義している。もちろん、Leech は会話の中で相手に対する否定的な価値表現を減少、もしくは和らげる場合 (neg-ポライトネス) と、肯定的な価値表現を増大、もしくは強める場合 (pos-ポライトネス) とを区別している。しかしながら、その区別も、会話の相手の二つの欲求、「フェイス」すなわち「自尊心」を失うことの回避と、「フェイス」の保持もしくは高揚の欲求の違いに応じた区別であり、双方ともにポライトネス (コミュニケーションにおける利他主義) の度合いを高める行動とされる点で Brown&Levinson の定義とは異なる。Brown&Levinson の「フェイス威嚇行為」への「補償行為」に限定される「ポライトネス」概念は、こうした Leech の「ポライトネス」概念から見れば、その一部に過ぎないことになるだろう。そしてまた、Brown&Levinson の「ポライトネス」概念が「フェイス威嚇行為」の回避を基準にしていることから、ポジティブ・ポライトネスもネガティブ・ポライトネスの一部となり、その独自の役割を失って何のために設定されたのか不明になってしまうことになるだろう。

Leech の Brown&Levinson のポライトネス理論の修正で今一つ注目すべき点は、R 値の修正である。すでに Leech (1983) は話者間の「負担と利益」の帰属の在り方や、「負担」の軽減等によって配慮を表す「丁寧さの原理」を提示しており、これを話者間の「やりとりの重さ」として利益・負担・好意に責務と権利を加えて、Brown&Levinson の R 値よりも内容と範囲を拡大している。これらの内容は実際の社会で確立されている価値である。このうち特に、責務と権利は社会や文化、さらに同じ社会や文化でも地域・年齢・性などの違いによって、何を責務や権利とみなすのかは異なるという Leech の注意点は留意すべきであろう。いずれにしても、Leech はこの拡大した R 値を重視しており、それはこの R 値を中核とする「三価ポライトネス」を価値の「やりとりのポライトネス」と位置づけている点に表れている。こうして、Leech は R 値をより強調して「やりとり」の中核として設定することで、R 値の高低に応じて、P 値、D 値を調整する適切な言語行為の選択の方策としてポライトネス・ストラテジーを位置づけるのである。

2.4 ポライトネス的観点からみた敬語

以上、Brown&Levinson、Leechを取り上げて、それぞれのポライトネス理論の中心的概念である「フェイス」「ポライトネス」「ポライトネス・ストラテジー」、そして言語形式選択に影響を与える要因（P値・D値・R値）の概念設定に関わる問題意識やその内容についてみてきた。そして双方とも、日本語の敬語についてもそれぞれのポライトネス的観点から言及しているので、これについても見ておくことにしたい。

Brown&LevinsonとLeechが共通して指摘する点は、敬語の言語形式やその文法・用法とP値・D値との間に明白な関係があるとする点である。Leechはこの点を強調して、敬語をR値すなわち「やりとりの重さ」に依存しない比較的安定したP値・D値という「二価」によって制約された「二価ポライトネス」と名付けている。これに対して、英語圏のポライトネスはR値が示す「やりとりの重さ」を中心とし、そのR値の実現をゴールとする「三価ポライトネス」が主流であるとする。一方Brown&Levinsonは敬語や人称の使用について、P値・D値が与える選択への影響の大きさを指摘した上で、固定された二者間では、R値が高くなれば、丁寧度の高い言語形式が使用されるであろうと予測している。いずれにせよ、両者ともにP値・D値と敬語の親和性を重視し、R値との関連については否定的、もしくは言及は多いとはいえない。

こうしたLeechやBrown&Levinsonの指摘とは異なって、敬語使用におけるR値の役割を問題として設定するとき、本稿では、(1) R値がどのように敬語使用に影響を与えて「フェイスリスク」を軽減するのか、(2) P値・D値・R値の再序列化にあたって、敬語はR値それ自体を表示することができるのか、の二点から敬語使用におけるR値の問題を考察することにした。そして本稿での考察は、基本的にはP値・D値・R値の「三価」の再序列化を通じて「フェイス威嚇行為」の軽減を動的に解明しようとしたBrown&Levinsonのポライトネス理論に依拠して行うことにする。

3. 「行為の負荷」から見る敬語使用

3.1 「行為の負荷」と性質

敬語使用に対するR値の影響を考察する場合、R値の負荷度の度合いだけでなく、R値に付加される性質についても少なくとも次の二点を考慮する必要があるだろう。

第一は、Brown&LevinsonのいうR値「ある文化におけるある行為の負荷度」について、それが「公」の性質を持つのか「私」の性質を持つのか、という「公私」の点である。辻村（1981）は、敬語使用には、敬卑、親疎、公私の三つの要素が影響するとしている。このうち、敬卑と親疎はBrown&Levinsonの、P値・D値に置き換えることができよう。敬語使用の三つ目の要素である「公私」について、辻村は、同じ人間関係でも「公」の場では敬語を使うことが多いことを指摘し、コミュニケーションが行われる「場」の性質を重視している。もちろん、この「公」が国家や自治体に限定されないことはいまでもないであろう。また、その違いが「ある行為の負荷」を当然とみなすのか（＝R値が低い）、または当然とはみなさないのか（＝R値が高い）に関わってくるため、辻村の指摘は重要である。このように考えると、辻村の指摘する「公私」の違いはR値に含まれて、フェイスリスクの見積りに影響を与えると考えることができよう。

第二に、Brown&LevinsonのいうR値「ある文化におけるある行為の負荷度」にLeechの追加した「責務と権利」を加えた場合、これらを「公」との関係で捉えることと親和性が強くなる点である。Leechの言うように、何をどの範囲で「責務」「権利」と捉えるのかは、文化や社会、また同じ文化でも時代や地域によって異なるだろう。「責務」「権利」という観念には、ある行為をすることが「当然」という社会的期待が込められており、そしてこの期待を充足させる行為が行為者の「フェイス」を保持させるからである。したがって、R値を捉える場合、その負荷度はもちろんのこと、話者間における「責務」「権利」の性質の認知

そのものも考慮されなければならないだろう。

上記のようにR値と「責務」「権利」や「公」という性質との親和性を考慮しつつ、以下、「尊敬語」「謙譲語」「丁寧語」「丁寧語」「美化語」について、その使用にあたってR値の影響と、それをどのように表現するのか（P値・D値・R値の再序列化）を見ることにしたい。

3.2 尊敬語の場合

「尊敬語」は話し手が聞き手（聞き手以外の話題の人物などが対象となることもある）の行為を直接高めるために使用する敬語で、一般的に、話し手よりも聞き手（対象）のほうが上位にあること、すなわちP値が高いこと、あるいは、話し手と聞き手（対象）の社会的距離が一定以上あること、すなわちD値が一定以上あることを表すことができる。尊敬語は、話し手が聞き手（対象）との所与の距離を、聞き手（対象）の位置を移動させることで拡大し、その位置から聞き手（対象）の行為が行われているように表現しているといえ、ネガティブ・ストラテジーとして機能するといえよう。この尊敬語が表示できるP値・D値の有り様が、そのまま「尊敬語」の一般的な使用条件となる。すなわち、一般的に尊敬語は話し手よりも聞き手（対象）のほうが上位者の立場にあたり、疎の関係にある場合に、話し手によって使用されるといえよう。ここでは、まずR値の高低によって尊敬語の使用が変化することを見ていくことにする。

尊敬語に属する表現は複数存在するが、代表的なものは①「尊敬語専用の動詞」②「助動詞～れる」③「お～になる」の三つであろう。「言う」という動詞を例にとれば、「おっしゃる（尊敬語専用動詞）」「言われる（～れる）」「お言いになる（お～になる）」となる。このように「言う」には「おっしゃる」という尊敬語専用の動詞が存在するが、「借りる」にはそれに相当する専用動詞がないように、「尊敬語専用動詞」を持たない動詞もある。また、上記三つの表現を組み合わせて使用することも可能であり、例えば①と②を組み合わせると④「おっしゃられる」、②と③を組み合わせると⑤「お言いになられる」などの表現も可能となる。構造的にみれば、①②③のように尊敬語の表現を単独で使用しているより、④⑤のように尊敬語表現を組み合わせて使用しているほうが、尊敬語の表す対人距離は大きいことになろう。しかしながら、どの表現が最も距離感のある表現、すなわち丁寧な印象を与える表現であるかを一義的に決定することは現代日本語においては困難である。これに対して、丁寧な印象が最も低いものは、尊敬語を簡易に作りやすい②助動詞「～れる」を使用したものであると考えられる。これらの表現のバリエーションがR値とどのように連動しているのか、検証してみたい。

Brown&Levinsonの「ある文化におけるある行為の負荷度」というR値の定義や、またLeechの「やりとり」のポライトネスという捉え方が影響して、P値・D値を固定してR値の高低を考える場合、「依頼」や「命令」などの行為指示型の発話内行為がその文脈として設定されやすい。しかしながら、行為指示型の発話内行為の文脈を設定すると、「お言いになられてください。」「おっしゃられていただけませんか。」のように、発話内効力に直接関係するような表現のバリエーション（上記例でいえば「指示」表現なのか「依頼」表現なのか、という発話内効力の調整）との関係も考慮しなくてはならなくなるため、考察しづらい。そこで、下記にあげる例は、聞き手（対象）に理解してもらうことを目的とする陳述型の表現のみが出てくる文脈を設定した。

- 1) 店長はそう言われましたよ。ですから、来週の月曜日はお休みをいただきました。
- 2) 店長はそうお言いになりましたよ。ですから、来週の月曜日はお休みをいただきました。
- 3) 店長はそうおっしゃいましたよ。ですから、来週の月曜日はお休みをいただきました。
- 4) 店長はそうおっしゃられましたよ。ですから、来週の月曜日はお休みをいただきました。

5) 店長はそうお言いになられましたよ。ですから、来週の月曜日はお休みをいただきました。

上記1)～5)を、飲食店において以前、部下が店長に対して休暇をもらう許可を得ていたが、そのことを改めて店長に言ったところ、店長がそれを忘れていて「え？」と言うような対応をしたという場面での、部下から店長に向けられた発話と設定してみよう。1)～5)の下線部分は陳述の形式をとる表現であり、発話内容（話し手である部下が休みを取ったことの原因）を聞き手（＝店長）に理解されること（受け入れられること）が意図されており、異議申し立てに近い語用論的意味を持つ。「異議申し立て」は聞き手の「フェイス」を脅かす可能性が非常に高い発話内行為といえ、「フェイスリスク」を軽減する「補償行為」が必要となり、その戦略の一環として尊敬語が使用され、P値・D値・R値が再序列化されて表現されることになる。

話し手と聞き手の二者が固定化している場合、話し手による1)～5)の使い分けは、“店長が言った内容”に応じると考えられる。例えば、店長が言った内容が仕事上の内容（例：「いつも月曜日は客が少ないから、今度からシフト外れていいよ」）であれば、店長が以前した発話の「公」の度合いは高まる。それに従い、上記のように発話しても店長がそれを認めることが職務上当然であると部下が考えれば、“店長が1)～5)の発話内容を理解すること（受け入れること）”の負荷度は低くなると、話し手の部下は見積もるかもしれない。

また、“店長が言った内容”が上記と同じく仕事上のものであっても、もし月曜日に大人数の予約が入った場合は、「聞き手（店長）自らが言った内容を根拠にして、月曜日に休みをとったこと」を店長に伝えるのは、店長の読みが外れたことを指摘するようでもあるため、店長のフェイスを脅かしやすいといえるだろう。このことから、“店長が1)～5)の発話内容を受け入れること”の負荷度は高いと部下は見積もるかもしれない。¹⁾

あるいは、“店長の言った内容”がたわいのない雑談（例えば「桜の見ごろになってきたね。そろそろ見に行った方がいいかも。」）なのであれば、話の「私」的な度合いが高まり、部下が上記1)～5)のように発話する権利を上司が当然視できなくなるかもしれない。そうすると、聞き手である“店長が1)～5)の発話内容を理解すること（受け入れること）”の負荷度は上がると部下は見積もるかもしれない。また“店長が言った内容”が同じ“たわいのない雑談”であっても、話し手が店長は冗談の通じる人だとふんでいれば、店長の「フェイスリスク」は低いと見積もるかもしれない。すなわち、ここでの1)～5)の敬語使用に影響を与えるR値は、店長が以前に行った発話に基づいて想定される公私の区別に関連するということになる。

このように、店長が言った内容が、仕事上の話にせよ、たわいのない冗談にせよ、話し手が見積もるR値を起点とした店長の「フェイスリスク」に応じて、1)～5)が選ばれることになる。また、そもそも1)～5)の発話自体の目的、すなわち“やりとりのゴール”が休暇取得の宣言なのか、店長をドッキリさせる冗談なのかによっても“店長のフェイスリスク”は異なってくるのであり、当然それに応じて1)～5)の表現選択も異なってくる。すなわち、やりとり全体の中における一発話の敬語表現が有するR値の重みの違いを考慮する必要がある。また、1)～5)で使用されている尊敬語表現のどれが最も対人距離を表すことができるのかについての認識は、個人差もあるため一般的な表現使用の尺度が示しにくい。このように、P値・D値の見積もりについては、共通理解が形成されやすいが、R値の見積もりは発話する状態や意図などで個人差が生じやすく、また、表現間の尺度もあいまいであることから、「フェイスリスク」の見積もりの誤算も含めて、使用される尊敬語表現に幅が出てくるのである。しかしながら、尊敬語が一定の幅を持ちながらもR値に応じて聞き手（対象）の側の位置を移動させることで、P値・D値を拡大する点こ

そ重視すべきであろう。

それでは、P 値・D 値・R 値の再序列化で尊敬語は R 値（行為の負荷）を表示することができるのだろうか。鶴田（2003）はポライトネスが表示される領域を、スタイル管理領域と発話内効力管理領域の二つにわけ、敬語が示すポライトネスはスタイル管理領域に属するとした。鶴田のいうスタイル管理領域とは敬語の語彙レベル（文法も含む）の調整を指し、発話内効力管理領域とは語用論的なやりとりの調整を指す。語用論的なやりとりの調整は、Leech（1983）の「負担と利益」の調整に代表される「丁寧さの原理」に基づく。確かに、尊敬語では「言う」と「おっしゃる」の違いは「敬意」すなわち「距離」の有無のみであり、その語彙の意味内容は同じであり、発話内効力の調整には反映されない。いわば、再序列化にあたって P 値・D 値のみの距離を表し、行為の負荷である R 値は表示できないことになる。しかしながら、例えば「お言いになる」と比較してみると、この場合「言うこと」が「なる」という描き方—すなわち「状況の変化（池上 1981）」という描き方—をしているため、「先生がおっしゃった。」という「誰が～する」といった描き方よりは、婉曲的に表現されており、厳密には発話内効力が異なる。この「お言いになる（状況の変化）」や「言われる（受け身と同型）」といった表現は、現代文法ではその描き方の違いには注目がされず、「敬意」の意味（言い換えれば P 値・D 値が高いこと）しか表示されていないのかもしれないが、厳密には現象の事態化方法（町田 2011）が異なるため、発話内効力に関係しているといえるだろう。それゆえ、事態化方法の差異に対する敏感さなどの個人的な要素が介在するものの、尊敬語の一部は事態化方法の異なりを基にして R 値を表示することができるといえるだろう。また、謙譲語の項で詳細を述べるが、授受形式である「くれる」の尊敬語である「くださる」を用いると、行為のやり取りを直接表示できるため、R 値（ある行為の負荷度）を明示することができる。授受形式は様々な文型に組み込みが可能で、「敬語」を補完する役割を持ち、これを含めて日本語の「敬語表現」と捉える必要があろう。

上記のように尊敬語があらわす対人距離の尺度は曖昧でその表現に幅はあるものの、話し手は R 値に応じて尊敬語を使って話者間の P 値・D 値を拡大していることが指摘できよう。また、尊敬語の一部は事態化方法の差異を基にして行為のやり取りを直接表示することも含めて、R 値の表示を可能にし、負荷を調整して再序列化していると考えられよう。

3.3 謙譲語の場合

「謙譲語」は話し手の行為を低めて表現することで、聞き手（対象）を立てる表現であると説明されることが一般的であった。しかしながら、この「低める」という表現が「へりくだり」を印象づけ、敬語の持つ上下関係の調整性ばかりが強調されるのは、現代社会の人間関係の在り方にはそぐわないということで、「低める」「へりくだる」といった表現は使用されなくなってきた。実際、日本語学習者の中には、自分はへりくだるような卑屈な存在ではないと、謙譲語に対して反発を覚える者もいる。そのため、「聞き手（対象）を高めるために」使うという説明が謙譲語にもなされるようになってきたが、尊敬語の場合は、「聞き手（対象）を高めるために、聞き手（対象）の行為を高めて表現する」と説明できるのに対し、謙譲語だと「聞き手（対象）を高めるため（立てるため）に、自分の行為をどう表現するのか？」という疑問が生じてくるだろう。

この点に関しては、Brown&Levinson のポライトネス理論における対人関係の距離の調整の概念を取り入れることで、合理的な説明が付きやすくなるを考える。すなわち謙譲語は、話し手が聞き手（対象）との所与の距離を自分の位置を移動させることで拡大し、その位置から自らの行為をするように表現しているといえ、ネガティブ・ポライトネスのストラテジーに相当すると考えられるのである。あるいは、より直感的に、話し手が聞き手（対象）に一步譲ること、すなわち距離をとることで敬意を表していると言い換

えてもよいだろう。

以上のように「謙譲語」の説明の在り方に変遷はあるものの、謙譲語が敬意の対象とするのは聞き手（対象）であることに違いはない。そこで「謙譲語」が表示する人間関係は、話し手よりも聞き手（対象）の方が上位にあること、すなわちP値が高いこと、あるいは、話し手と聞き手の社会的距離が一定以上あること、すなわちD値が一定以上あることとなる。そして、この表示内容が尊敬語同様、謙譲語の一般的な使用条件となるのである。

謙譲語を表す表現は複数存在するが、代表的なものをあげると、①謙譲語専用の動詞、②お/ご～する、また丁重語である「いたす」表現との組み合わせで、③「お/ご～いたす」という謙譲語と丁重語のハイブリッド形式も存在する。さらに、使役と授受形式を組み合わせ、話し手を「許可」をもらう側、聞き手（対象）を「許可」を与える側に位置づけることで、授受の原理から聞き手を高め、実質、謙譲表現として機能している④「～させていただく（使役＋授受形式）」がある。そして、①～④の表現をさらに組み合わせることで多様な謙譲語表現のバリエーションが生まれることになる。下記1)～6)はその例である。

- 1) 明日、伺います。（「行く」を表す謙譲語専用の動詞）
- 2) 明日、お伺いします。（「行く」を表す謙譲語専用の動詞＋お/ご～する）
- 3) 明日、お伺いいたします。（「行く」を表す謙譲語専用の動詞＋お/ご～いたす）
- 4) 明日、行かせていただきます。（使役＋授受形式「テイタダク」（「テモラウ」の謙譲語）
- 5) 明日、伺わせていただきます。（「行く」を表す尊敬語専用動詞＋使役＋授受形式「テイタダク」）
- 6) 明日、お伺いさせていただきます。（「行く」を表す謙譲語専用の動詞＋お/ご～する＋使役＋授受形式「テイタダク」）

尊敬語では「～れる」のような助動詞が接続することにより、動詞が尊敬語として機能するという文法があるのに対し、謙譲語には謙譲語をつくる助動詞は存在しない。その代わり、使役＋授受形式「～させていただく」の形が近年では様々な動詞に後接し、頻繁に使用されている。使役と授受形式を組み合わせ「～させていただく」²⁾は、許可を得ていることを含意しており、発話内効力上、丁寧度の高い表現となるのである。それゆえ、6)のように、「～させていただく」を「行く」の謙譲語専用動詞「伺う」、「お/ご～する」と併用することで、非常に丁寧な印象を聞き手に与えることになるのである。このように、授受形式を組み込むと「負担と利益」の調整を明示的に表すことができ、且つ授受の性質上、聞き手を許可の与え手として上位に位置づけることと謙譲語の相乗効果が発生するため、「お/ご～させていただく」はスタイル管理領域と発話内効力管理領域とにまたがるポライトネスの調整ができることになる。すなわち、P値・D値・R値の再序列化の際に、行為の負荷となるR値を、行為の授受として「テイタダク」を使用することにより明示できることを意味する³⁾。このようなR値の表示は「テイタダク」だけでなく、「テサシアゲル」などの授受形式の謙譲表現（そして「テクダサル」という尊敬表現）は、行為のやりとり表示という形を通じて行われている⁴⁾。また、丁重語の項で詳細を述べるが、丁重語はR値の「公」「責務」「権利」といった性質との親和性が強いので、「お/ご～いたす」という謙譲語と丁重語のハイブリッド形式もR値の表示に関わっていることが示唆できる。すなわち、少なくとも授受形式の入った謙譲表現と丁重語とのハイブリッド形式の謙譲表現は、P値・D値・R値の再序列化にあたってR値の明示が可能になるといえる。

これに対して、一般的に表現が長くなるほど、すなわち敬語表現を重ねるほど丁寧な印象を与えるといわれているが、2)「お伺いします」と4)「行かせていただきます」とでは、どちらがより丁寧な印象となるのかは曖昧であり、したがってまた表現間の丁寧度の尺度（すなわち、対人距離の尺度）もはっきりと

示すことはできないといえよう。

3.4 丁重語の場合

「丁重語」は2007年に文化審議会によって出された『敬語の指針』で、それまで謙譲語に分類されていたものの中から、直接敬意を向ける先のないものを区別して分類し直したものである。「直接」敬意を向ける先はないが、間接的に向ける先はあり、それは「聞き手」としてしている。

「丁重語」にあたる語は「申す」「参る」「いたす」「存じる」「おる」など多くないが、よく使われる例として「申す」があり、「申す」を取り上げてまず丁重語における「聞き手」について説明しよう。「申す」の使用による敬意がなぜ直接言葉を向ける先にならないのかというと、(1)「私は、そのやくざに早く足を洗うように申しました。(菊池2022:25)」の場合、もし「申す」が直接「足を洗うように」という言葉を向けた先に対して敬意を払って、その人物に一步譲る形の表現をした(謙譲語)と解釈すると、「やくざ」に対して敬意をはらっていることになり、社会通念上、違和感が生じることになるからである。そこで、この場合「申す」を使ってなんらかの敬意を表す対象は「やくざ」ではなく、(1)の発話を聞いている「聞き手」ということになり、話し手は「聞き手」に譲る形の表現をすることで、「聞き手」との距離を一定に保ち、敬意を表していると考えられよう。

「申す」は、「申し付ける」「申し出る」などのように複合語として機能している場合も多い。「申す」単体が表す敬意は間接的な「聞き手」へ向かうのに対し、このような複合語には敬意が向かう方向性を含意していると考えられるものもある。以下、敬意の向かう方向性とR値の性質である「権利」「責務」との関係から「丁重語」を考察してみよう。

現在、「申し付ける」をよく聞ことができるのは、サービス業の場で(2)「何かございましたら、どうぞご遠慮なくお申し付けください。」のように使われる例である。広辞苑、明鏡などによれば、「申し付ける」の意味は、「上の者が下の者に」用を「言いつける」あるいは「命令する」であり、上下関係をその語の使用条件に含んでいる。(2)の場合、「申し付ける」という行為を行うのは聞き手であるため、「聞き手が話し手に対してなんらかの権限を持っており、それをもとに話し手に用を言いつけること」を話し手が聞き手に「～てください」を使って指示、あるいは丁寧な依頼をするという発話内行為が成立することになる。そうすると、「聞き手が話し手よりも権限を持つという意味で上位者であること」を「申し付ける」は含意していることになるため、敬意の対象は聞き手ということになる。そして、話し手は聞き手の「申し付ける内容」を実行する責務を負うこと、すなわちR値(行為の負荷度)を明示していることになるだろう。それゆえ、この行為の負荷(R値)は「責務」の性質を持つことになる。

一方、「申し出る」は、広辞苑によれば「(希望・要求・意見などを)進んで言って出る」とあり、明鏡などではこれに「公の機関や目上の人などに」対してという条件が加わる。すなわち、「申し出る」も上下関係をその語の使用条件に含んでいる場合があるといえる。「申し出る」は公の機関以外のサービス業でも、

(3)「何かありましたら、お申し出ください。」のような使い方をされることがよくある表現である。この場合「申し出る」という行為を行うのは聞き手、すなわち「サービスを受ける側の人間」であるため、聞き手を話し手よりも「下位者」に位置づけることになり、待遇的に矛盾を感じやすい表現である。⁹⁾ それでもなぜ、「申し出る」という敬語表現を一般的なサービス業でも使用するのかという理由については二つ考えられよう。一つ目は、混同である。「申し出る」と似た表現の「申し付ける」が上位者から下位者に使える語であることから、単純に混同して使用している可能性もあろう。二つ目は、語に組み込まれた「申す」の持つ丁重語的な性質から、「申す」を使うことにより、聞き手に配慮を表していると話し手が考えている場合である。このように、「申し出る」という語を考えると、語自体が含意する上下関係と、「申す」を丁重

語とした場合の敬意の方向性が矛盾しているが、「丁重語」的なふるまいに引きずられて使用していることが推測される。

以上、「申す」を含む複合語が含意する上下関係は「権限」に基づくものであるという例を見てきた。「権限」は「責務」と裏腹の位置にあるものであり、したがって「権利」的な意味も含む。すなわち、配慮のための言語形式選択を決める要因のうち、Leechが解釈したR値の概念に含まれるものだといえよう。R値はもともと「ある文化におけるある行為の負荷度」であるとされているが、「ある文化におけるある行為の負荷度」は、その行為が「責務」に基づくものなのかによって影響を受けやすい。例えば火事現場は危険が伴うものであり、そこで「消火をする」という行為の負荷度は一般人にとっては高いが、消防士にとっては「責務」にもとづくもので、周りからはそのような行為が、職務の上である意味、「当然のこと」として求められることがある。言い換えれば、一般人は消防士に消火してもらう「権利」を有しているのである。このように考えると、R値を「責務」や「権利」にまで拡大したLeechの見解は的を射ているといえよう。

「責務」や「権利」が伴いやすい「仕事」や「公」の場では、「場」の改まりが求められる一方で、そこでの言語行為を「責務」の面から見れば負荷度は上がり、「権利」の面から見れば負荷度は下がることが考えられよう。「何かございましたら、ぜひお申し付けください」の例で言うならば、「公」の「仕事」の「場」での発話であるがゆえに、フォーマル度が高まり、敬語使用が求められてくる一方で、話し手に対する聞き手からの「指示・命令」という言語行為は、聞き手の「権利」として認められているため、聞き手が「指示・命令」することに重い負荷を感じる必要はないことを表しているのである。そして、この二つの性質を同時に表すことができるのが「申し付ける」という敬語要素を含んだ表現だということができよう。このように「申す」の性質を考えると、敬語の中でも丁重語は特に「権利」と「責務」という性質を帯びたR値に連動しやすいことが考えられる。また、P値・D値・R値の再序列化を表示する際には、その「公」「責務」「権利」の性質ゆえにR値（行為の負荷）の高低を表示することもできるのだといえよう。

3.5 丁寧語・美化語の場合

丁寧語は聞き手への配慮をあらわす敬語とされ、その代表として「です・ます」がこれに該当する。丁寧語は尊敬語や謙譲語などの他の敬語形式と同時に使用されることが多いが、丁寧語が向ける配慮の対象と尊敬語や謙譲語が向ける対象と一致する必要はない（一致してもよい）。(1)「先生がそうおっしゃったよ。」、(2)「先生がそうおっしゃいましたよ。」を例にすると、(1)では先生には「おっしゃる」を使ってP値・D値の高いことを示しているが、この発話を聞いている人物と話し手のP値・D値はそれほど高くないことを示している。それに対して、(2)は先生には尊敬語を、発話を聞いている人物には丁寧語「ました」を使うことで、両者に対して話し手との間の対人距離が一定以上離れていることを示している。尊敬語や謙譲語は話題の人物という「場」を共有しない人物も対象に使用できるのに対し、丁寧語は「場」を共有する聞き手を対象に使用される。

日本語では、尊敬語や謙譲語を使用しなくても、丁寧語のみを使用して聞き手に配慮を示す場合も多い。例えば、非日本語母語話者を対象とした日本語教科書などでは、「です・ます」使用が基本となって例文や本文が展開されている。これは非日本語母語話者が日本人と初対面で会話すること（すなわち、少なくともD値（社会的距離）は高いことになる）を想定して、日本語学習中の非日本語母語話者でも使用しやすく、且つ最低限の配慮を示せる形式として採用しているとも考えられる。言い換えれば、日本における実際の社会文化を反映した言語使用のあり方として、「丁寧語」という対者敬語を含んだ実用に即した形で非日本語母語話者に教えているのである。日本語教科書の事例は、敬語では配慮の表し方にとって、具体的な「場」を共有していることの重要性を改めて示唆しているといえよう。このように考えると、丁寧語

はR値の高低の影響を受けにくく、またP値・D値・R値の再序列化にも関係がないように思える。

しかしながら、上記のように、P値・D値がある程度高い場合は、一般的に丁寧語の使用は必須となるが、P値・D値が低い関係においてその使用がなされる場合はR値に負うところが大きいといえる。特に依頼の文脈においては、丁寧語が親しい友人間でも使われることは例をあげるまでもないであろう。その他にも、例えば、喧嘩をしている恋人に「明日一緒に食事に行っていただけませんか。」といえ、「テイタダク」という行為のやりとりを明示する謙譲表現と相まって、冗談めかして聞かせることで、相手を笑わせ、仲直りを促すというやりとりを効果的にすることができるかもしれない。ここで「明日一緒に食事に行ってもらえる？」と言ってももちろんよいが、聞き手をくすりと笑わせるようなおかしみは小さくなるだろう。このことから、P値・D値・R値の再序列化では、丁寧語はR値（ここでは「仲直りをする事」の負荷）をP値・D値に吸収して表示しているといえ、その分言葉の上での人間関係の切り替えを意識させることが、メッセージの発話内効力（ここでは「仲直りの促し」）を際立たせる効果があるのだといえよう。

また、結婚をした友人に祝意を述べる際、「結婚おめでとう。」と丁寧語を使用しなくてももちろん祝意は伝わるし、親しみも感じる。しかし、ここで「ご結婚、おめでとうございます。」と述べると、相手にハッとさせる祝意となろう。祝意を伝えるということ自体はポジティブ・ストラテジーにあたるが、普段敬語使用をしない親しい間柄で、それを伝えるときに敢えてネガティブ・ストラテジーにあたる敬語を使って、対人距離をとって表現することで（すなわち、P値・D値・R値の再序列化を試みせることで）メッセージの特別性を表現できるのだと考えられよう。言い換えれば、一般的に丁寧語を使用しない親しい間柄において、発話内効力を効果的に表現するために丁寧語は有効であると考えられる。P値・D値が低い場合に、その使用によりメッセージに特別性を持たせるという効果は、丁寧語のみならず敬語全般に通じるものであると考えられる。

美化語は「お花」「ごはん」にみられるような接頭語「お」「ご」等を指すが、その使用によって人に敬意を示すわけではなく、「花」や「水」といった対象を美しく見せる（聞かせる）ものとされる。このことは、対象を美しく見せる（聞かせる）言い方が求められている「場」なり、社会通念が存在していることの証左ともいえる。例えば、同じ人物であってもスピーチなどの「公」の場と、「私」的なおしゃべりとは美化語の使用状況が異なることが考えられるだろう。また一般的に女性が男性よりも美化語を多用する傾向について、そのことがジェンダー的に適切であるかどうかは別の問題として、女性は上品に丁寧に話すべきという期待が社会という「場」に暗黙の裡に存在しているのだともいえる。このことは、対象を「美しく」表現する、ということが「上品さ」に置き換えられて、女性に特別な「負荷」をかけているのかもしれない。

4. 「三価ポライトネス」としての敬語

以上検証してきたことを整理しておきたい。

第一に、敬語はR値の影響を受ける「三価ポライトネス」として理解することができる。これまで「尊敬語」や「謙譲語」の例で見えてきたように、敬語使用にはP値・D値のみならず、R値も大きく影響していることは明らかである。LeechのいうようにR値が高くなれば、話し手と聞き手の「やりとり」は重くなるが、Brown&Levinsonのポライトネス理論からいえば、それだけ「フェイスリスク」は高まる。敬語はこうした「重さ」あるいは「フェイスリスク」に応じた使用ができる。R値は大きく分けて、①負荷度、②公・私の性質③責務・権利、に関わる。再度わかりやすい例でいえば、学生と教師の間での「依頼」のやりとりであったとしても、「先生、この本を貸してくれませんか。」と「先生、推薦書を書いていただけませんか。」

では、敬体の「です・ます」一すなわち丁寧語一を使用している点では同じだが、一方では「くれる」を使用し、もう一方は「テモラウ」の謙譲語である「テイタダク」を使用している。この違いは、「本を貸すこと」と「推薦書を書くこと」のR値の違いが話し手に認識されていることから生じているが、それに応じた敬語選択と使用を通じて学生と教師の間のP値・D値・R値の再序列化の違いを表しているのである。

こうしたR値の高低と性質による話者間のP値・D値・R値の再序列化にあたって、話し手が聞き手を中心として再序列化（尊敬語）するのか、逆に話し手自身を中心として再序列化（謙譲語）して話者間の距離を拡大したり、または縮小したりしているのかという点について注目する必要がある。そして、この再序列化は、敬語が表す丁寧度、すなわち対人距離の尺度があいまいであることから、一定の幅の中でなされるといえよう。

もちろん、一定の幅があるといっても、その前提として敬語を使用する話し手と聞き手双方に共通する二つの条件を満たす必要がある。一つはP値・D値・R値についてほぼ共通する認識が存在しているという条件である。Brown&Levinsonのポライトネス理論においても、互いを参照・承認しあう「フェイス」や、R値の「ある文化におけるある行為の負荷度」という定義にみられるように、この条件を前提にしているのである。もう一つは、話し手・聞き手双方が敬語を言語資源として上位者や下位者の立場で場や時に応じて、使用している経験があるという条件である。この使用経験の有無が、第一の条件のP値・D値・R値の認識、したがって「フェイスリスク」の見積もりにも通じていることは重視されてよいと考える。そしてこれらの条件を満たして敬語を使用できることが、自己が社会の成員としてふさわしいことを提示することや他者からもそのように承認されることにも関わっているのである。

第二に、敬語は発話内効力、すなわち「行為の負荷」の調整や表示にも関わることができる。例えば、「テイタダク」「テクダサル」「テサシアゲル」などの行為の授受形式を用いた敬語表現は、行為の授受の表示を通じてR値（行為の負荷）を明示できる⁹⁾。また、丁寧語のようにR値の「公」「責務」「権利」といった性質と親和性が強い表現は、その使用により「責務」「権利」や「公」といったR値の性質とその性質に基づく当然性からの負荷の大小の表示も可能となる。そして、P値・D値が低い場合の敬語使用は、「冗談」を「冗談」たらしめるなど、発話内効力を際立たせる役割を持つことを見てきた。

また尊敬語「お～になる」と謙譲語「お～する」の相違は、一方は他者の行為を状況として描き、他方は自己の行為を行動として描く、「する」と「なる」の違いに基づく事態化方法の違いといえる。同様に、「①先生がおっしゃった」と「②先生がお言いになった。」とでは、双方尊敬語を用いてはいるが、①では「言う」という行為をあくまで「先生」の行為として描いているのに対し、②では状況の変化として描いており、発話内効力は異なってくる。これは、尊敬語の助動詞「れる・られる」が受身形と通じていることとも関連して、他者の行為を状況として眺める自分（すなわち自分にとって他者の行為は所与）という描き方が尊敬語の事態化の根底にあると考えられる。したがって、事態化方法の異なりを基に、少なくとも敬語表現の一部はR値の表示が可能になるといえるのである。

以上のように、敬語は、R値の影響を受けて、P値・D値・R値を再序列化する「三価ポライトネス」として機能していると考えられる。しかしながら、この「三価ポライトネス」としての敬語は、R値を表示することが可能な事態化方法の違いや授受形式の尊敬語形や謙譲語形などを通じて実現するのであり、これを含めた「敬語表現」として捉える必要があろう。

5. おわりに

以上、敬語が「三価ポライトネス」を表現できる言語形式であることで、話し手は敬語を使用して聞き

手への「行為の負荷」からくる「フェイス威嚇行為」をも軽減し、話し手と聞き手の関係の確立・維持を図ることを考察してきた。このことと関連して、最後にポライトネス・ストラテジーとしての敬語使用について述べることにする。

敬語使用は一般的に、「敬して遠ざける」ネガティブ・ストラテジーとして機能しているとされてきた。これは、従来敬語使用においては特に上下関係が重視され、話し手のほうが下位者であることが敬語使用の考察における前提であったことと関係がある。このように上下関係を重視すると、相手の位置を高めたり（尊敬語）、話し手の位置を低くしたり（謙譲語）することで、話し手と聞き手の距離を遠ざけることができるため、敬語使用はネガティブ・ストラテジーとなる。しかしながら、現実の関係では上位者が下位者に対して敬語を使用する場合もある。この場合は、話し手（上位者）が聞き手（下位者）の縦の位置を高め（尊敬語）たり、話し手（上位者）の位置を下げる（謙譲語）ことで、話し手と聞き手の間の距離感を所与の現実よりも縮めて表示するポジティブ・ストラテジーとなるのである。すなわち、敬語使用は、干渉されたくないという欲求＝「ネガティブ・フェイス」を満たすネガティブ・ストラテジーであると同時に、相手に認められたいという欲求＝「ポジティブ・フェイス」を満たすポジティブ・ストラテジーとしても機能していることが指摘できよう。このことは、敬語使用に慣れていない若年者などが、敬語使用によって対応されたとき、一人前になったという実感に結びつきやすいことから裏付けられる。そしてまた、「フェイス」の高揚を重視する Leech のポライトネスの観点からも敬語をとらえ直す必要があることを示唆しているのかもしれない。

注)

- 1) 話し手が「店長自ら言ってくせに」というような批判的、皮肉的な意図・態度を込めて、すなわち店長の「フェイス」を脅かすことを目的として、1)～5)の中から選択して発話する可能性もあるだろう。この場合、もともと尊敬語の程度の低い表現を選ぶこともあるだろうし、慇懃無礼の効果を狙ってもっとも程度の高い表現を選ぶこともあるだろう。しかしながら、この場合は相手がフェイスを保てるような言語行為を行う「ポライトネス」からは外れるため、ここでは考察しない。
- 2) 「～させてもらう」も構造的に謙譲の意味を含意していると考えられるが、「テモラウ」が謙譲語ではないことから、多くの人が謙譲語表現とは認識していないようである。言い換えれば「許可」を「もらう」という構造だけでは「謙譲語」と認識されにくいのだといえよう。
- 3) しかしながら、近年の「～させていただく」の多用傾向は、「～させていただく」という形が「許可を得る」という本来の発話内効力から離れて、「敬意」の意味だけを表示しはじめていること—すなわち、ある意味で語彙レベルの謙譲語化—を示唆してもいよう（横倉 2013）。それでもまだ、「許可求め/与え」の文脈が成立しない場面での使用に違和感を覚える人も多くいることから—例えば結婚式のスピーチで「わたしは大学時代、田中君の友人をさせていただいておりました。」のような表現—、「～させていただく」は語用論的文脈に支えられた発話内効力の調整にもまだ深くかかわっていると捉えられよう。
- 4) ただし「テサシアゲル」は謙譲語でも使用するとフェイス侵害になることが多い表現である。これは敬語の上位者の概念よりも授受の上位者の概念の方が優先されるためである。それゆえ、「テサシアゲル」を使用してR値を明示する場合と、そうでない場合とではP値・D値・R値の再序列化に差が生じるのである。
- 5) かつては公の機関は庶民より上であるという認識が共有されており、その意味では上下関係とは矛盾しなかったであろう。しかしながら、行政をサービス提供者とみなす現在では待遇的に矛盾を感じやすい表現となつて

いる。

6) もちろん、厳密に言えば「テモラウ」「テクレル」「テヤル」の意味成分が「行為の授受」を表しているのであるが、敬語形の「テイタダク」「テクダサル」「テサシアゲル」と併用されることが多く、「～させていただく」などはそれ自体で敬語表現として定着しているように感じられる。

参考文献

- 1) Brown, P. & Levinson, S. (1978/1987). *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge: Cambridge University Press (邦訳: ペネロピ・ブラウン, スティーヴン・C・レヴィンソン (2011) 『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』 田中典子監訳 斉藤幸子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子訳, 研究社)
 - 2) 文化審議会 (2007) 『敬語の指針』(答申) keigo_tosin.pdf (bunka.go.jp)
 - 3) Erving Goffman (1967) *INTERACTION RITUAL Essays on Face-to-Face Behavior*, Anchor Books, Doubleday and Company Inc. New York (邦訳: アーヴィング・ゴッフマン (2002) 『儀礼としての相互行為 対面行動の社会学<新訳版>』 浅野敏夫訳 法政大学出版局)
 - 4) Geoffrey Leech (2014) *The Pragmatics of Politeness*, Oxford University press (邦訳: ジェフリー・リーチ (2020) 『ポライトネスの語用論』 監訳 田中典子 研究社文)
 - 5) Geoffrey N. Leech (1983) *Principles of Pragmatics*, Routledge (邦訳: リーチ, N・ジェフリー(1987) 『語用論』 池上嘉彦・河上誓作訳 紀伊国屋書店)
 - 6) 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学 一言語文化タイポロジーへの試論』 大修館書店
 - 7) 菊池康人 (2022) 『敬語の指針』についての覚書と、もうひとつの敬語分類案 近藤康弘・沢田淳 (編) 『敬語の文法と語用論』 開拓社 17-58.
 - 8) 町田健 (2011) 『言語構造基礎論 -文の意味と構造-』 勁草書房
 - 9) Paul Grice (1989) *STUDIES IN THE WAY OF WORDS*, Harvard UP. (邦訳: グライス, P. (1998) 『論理と会話』 清塚邦彦訳, 勁草書房)
 - 10) 滝浦真人 (2005) 『日本の敬語論 ポライトネス理論からの再検討』 大修館書店
 - 11) 辻村俊樹 (1981) 「敬語意識史—敬語史における敬と卑、親と疎、公と私—」 森岡健二・宮地裕・寺村秀夫・川端善明 (編) 『講座 日本語学9』 明治書院 26-42.
 - 12) 鶴田庸子 (2003) 「敬語を使うとどのようなポライトネスが伝わるのか—発話内効力管理領域とポライトネスの違い—」 『日本プラグマティクス学界』 **13** 17-38.
 - 13) 横倉真弥 (2013) 『言語ポライトネスとしての日本語授受形式に関する研究』 名古屋大学文学研究科 博士学位論文
- * 『広辞苑』第六版 岩波書店
- * 『明鏡国語辞典』第二版 大修館書店